世界婦人

▲重・記事……婦人と參政權(安部磯雄)‖片々錄(女學生)‖思ひ浮ぶ歌(村田屋川)‖信、神、道(活田義治)‖排否學に就て(かの子)

婦人解放に就て

「無垢助氏に答ふる文」

福田英子

(一)心ひるみ手わなゝく

無垢助様と申す御方が、婦人解放に就て親切なる御教訓を賜はりしとは、本紙第三十五號によりて讀者諸君も既に御承知の御事と存じます。無垢助様とはそも如何なる御方様にてあらせ給ふか、唯だ其の假りの御名にては確かには想像も致し兼ねますが既に此世の酸も甘も具さに嘗め給ひし御方と察し上ぐるのであります、さるにても、吾が二十餘年間の失敗史を委はしくも御談り下され、身に顧みて最ど恥かしく、今ま筆とるにさへ心ひるみ手わなゝく次第で御座います。

(二)恐るべき感壓

私は、年に不足も無き身ながら、血氣にのみはやり、輕躁にのみ流れて、後悔することの多きに我ながら殆どあきるゝ程で御座います。本誌を創刊いたして以來、既に三年にもなりますが、今日に至りては如何にして此問題――婦人解放問題を――解決すべきか、如何にして此雜誌を維持すべきか、如何にして此運動を開發すべきかに就きて思案に暮て居る次第なのです。始むるは易けれども遂ぐるは至難中の至難事であるが、殊に此頃痛切に感ぜられます。此時に當りて無垢助様の大痛棒に接し、一時は暗憺たる境涯に墜落したる心地さへ致しました。素より無垢助様の御優さしき御言葉、懇ろなる御教示は、私にとりて、强き力、淸き光と成りますが、乍併、現代の男子階級に對して戰爭的態度をとり來れる吾等にとりては實に恐るべき感壓を蒙るの心地が致すのです。

(三)發動者は男子

同情深き無垢助様。御身は『世人一概に……女子にさへ同情すれば我面目立つとなす如く見ゆるは是れ聊か理由に乏しくは非ざるか』と申さるれども是れは餘りに理窟にのみ走り給はずや私共は素より今日の社會に於ても女子の勢力が仲々に强烈なるとを認めて居ります。男三郎氏や、伊藤公や、森田草平氏や、電小僧や、是等の事實を目擊すれば如何にも女子に偉大なる不可思議を存する如く思はれます。乍併、能く〳〵事實の眞相を精察し給へば、猶ほ一段進みたる解釋が出で來るでありましやう。抑も是等の事實に於て主動者の地位に立つた者は男女いづれでありましやう。素より情の上よりすれば、男は女に動かされたでありましやうが、乍併、其發意、其發動者は男で御座います男は自ら女を得んが爲に動き懸けたので御座います。而して男三郎氏や、伊藤公や、電小僧等を攻擊し排斥したものは誰でありましたか、ヤハリ男子ではありませんか。此等の事例にして既に斯の如くで御座いますし、他の一般の事は推して知るとが出來ましやう。事を起すも、其事を批判し處分するも皆男子であつて、女子は唯だ其附從材料たるに過ぎません。此點に於て女子が男子の奴隷たる地位にあると申しても決して差間へはありますまい。今日の貧しき女子は實に富者と、男子に對して二重奴隷なので御座います。

(四)是こそ二重奴隷の證據

眞面目なる無垢助様。『彼は抑壓する時は忽ちにヒガムなり、放任する時は忽ちにツケ揚るなり、離るれば恨み親しめば亂るなり、然も決して命懸けに男子を愛せず』との御言葉には吾等と雖ども異論はありません、事實は如何に辯ずるも事實で御座います。ケレど今少しく同情の眼を以て女子の境遇を御覽下さい一體今日の女子が斯の如く自治自制自立の心に乏しくして、徒らに男子の手綱に操つられて狂へる如くなるは何が故でありましやうか。私は思ひます、是れこそ實に今日の女子が二重奴隷たるとを證明するものなるとを。無垢助様、此處は能く〳〵御推察下さい。今日の一般女子が一人前の人間たるに足らぬ有様なのは、實に其社會が一人前の地位を與へぬからではありませんか。昔時男子奴隷の精神能力は、尙は今日の女子と同様であつたとのとでは御座いませんか。若し婦人の解放が眞に吾等の想ふ如く實行せられましたなら、婦人は皆、男子と少しも異らぬ様な發達を致すに相違ありません

(五)男子を憎しと思はず

無垢助様。御身はまた、『刑法上其他の法律上習慣上に於て、女子を比較的下位に置ける今日に於てすら尙且以上の如し、若し進んで此等の差別を撤去せんか。天下の女子は如何に跳梁を逞ふすべきか、之を想像して予は寧ろ戰慄せざるを得ざる也』と思と切つた御議論をなされましたが、是は些か杞人の憂を再びせらるゝのでは御座いますまいか。私も思ひ切つて申します。若し一切の束縛を除き去つた曉に女子が果して跳梁する者なら、其は自然の理法として致方無き次第では御座いませんか。其れをしも厭ふと言ひ給はゞ其は男子の勝手と申すものでは御座いますまいか。仰せの如く、『女子が驕慢に走らざるや否やは暫く疑問たらざるを得ず』であります。乍併、若し外よりの束縛を除きて驕慢に走るとすれば其は單に女子のみのとでは無くて男子方とて同じとで御座いましやう。抑も跳梁の驕慢のと申さるるは、男女間の心情關係を甚だ誤解し給へる結果では御座いませんか。經驗にも智識にも乏しき吾等が斯く申すは、嗚呼がましき事なれど、女子は決して男子を憎しと思はず、男子も亦た決して女子を可愛からずとは申されぬとと存じます。男子の誠の愛に接しては、ドウして〳〵跳梁の驕慢のと申すとは夢にも起らぬが女子の通有性と存じます、男子方の御心情は如何で御座います。

(六)思想改革の必要

無垢助様。吾等が常に經濟的解放を叫び居るとは、御身の能く御承知の事でありますしかし其經濟的解放と申すとは唯だ婦人解放の主要なる標語たるに過ぎません。吾等は其以前に於て、先づ男女間に階級的差別を立つる所の今日の思想を打破せねばなりません、若し此思想上の革命を行はずして經濟的解放を行はんか、恰も游泳を知らぬ人を突然大海中に投じたる如く、男女共に大なる慘境に陷ゐるで御座いましやう經濟的解放運動其ものにも或は大紛亂を免れぬかも知れませぬが、女子が自由を得た後には更に紛亂を生せぬとも限りません。故に今日より此點に於ける思想の改革を爲し、人心をして慣れしめて置くとは甚だ急務で御座いましやう、私共身に顧みれば、淺學、無識、先輩諸士、一般世人に對して甚だ御恥かしさとなれど、唯だ心だけは深く之を期して居ります。御教示に對して及ばずながら此蕪辭を呈します。何卒御見棄て無く重ねて御高論賜はる様、伏して祈り奉る。四月廿日

二葉亭四迷氏逝く

福田英子

○二葉亭四迷即ち長谷川辰之助氏が、露都に於て宿痾の冒す所となり、歸帆中印度洋上にて永眠し給ひしとは世の人の旣に能く知り給ふ所ならん

○吾れ初めて長谷川氏の温容に接するを得たるは去る卅九年二月のとなりき、當時ポーランドの志士ピルスツキー氏滯京せしが、適々新紀元晩餐會に於て吾は此亡命客と同席したり。長谷川氏を初めて吾が茅屋に伴ひ來りしは即ちピルスツキー氏なりき、露國革命志士の紹介により、て相識となれる我が長谷川氏は到底世の尋常の文士には非ざりき。何と形容し奉らすべきかあの長大なる身體に優しき心情を湛へ玉ふを、飽も侵すべからざる風容と、ドコまでも賴もしき俠骨とを、吾は父の如く、兄の如く、師の如く、深くも慕い奉りしぞかし。

○曾て本紙に掲載せし『志士の末期』『愛』『旅のへイロ』等は實に氏が本紙に惠まんとて特に筆とり給ひしなりき。並々の雜誌社書肆等が如何に請ふとも仲々に筆とり給はぬ氏が斯く引續きて筆とり賜りしは全く孱弱なる吾が苦境を憐れみ給ひしが故なりき。

○氏が露國行の事確定せるの時、私が宿望を達するの時が始て到來しました』と喜色滿面にて語られしは恰も去年の今時なりき其聲は尙ほ我が耳朶に新なり。其色は尙ほ我が眼底に鮮やかなり。氏が歸國の已むべからざるに至りし時の無念さは、到底他人の察すると能はざる所なるべし。

○露都に着せし上は『日露協會』の通信を常に本紙に送らんと約せられしが今は其も空し、明治四十二年五月三十日、霧の如き新橋停車場、霧の如き雜踏の中に、[illegible]となり給へる長谷川恩師を迎ふ。悲しき哉。

▲重・記事……伊三坊(木下尙江)‖伯父か甥か(シルレル原著)‖女の幸福(文子)‖おわさ(晩望)‖漢魂和(和漢の山人)‖嬉し花(孤舟桿郎)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人と參政權

安部磯雄

昨年英國の婦人が國會議員の選擧權を得んとて激烈なる運動を試みたのを我國の新聞紙はお轉婆連の暴行なぞと、嘲笑したのであるが、これは決して斯く輕々に論じ去るべき所の問題ではない、世界の强國にこそ婦人の參政權を得たる例は少ないけれども、平和主義、平等主義の文明を以て基礎とせる小國の中には、婦人にも政治上男子と同等の位地を與へて居るものが多い

婦人に市會議員の選擧權を與へて居るのは丁抹及びアイスランドであるが、國會議員の選擧權を與へて居るのは瑞典、諾威及びフヰンランドである。濠洲に於ける婦人は市會議員、州會議員及び國會議員を選擧するの權を有して居る。然しこれだけではない。婦人は啻に選擧權を有するのみでなく彼等は既に被選擧權をも得て居るのである。アイスランドの婦人は市會議員たるの資格をも有して居るのであるが、昨年の選擧には首府レイクヤブヰックに於て數人の婦人が選擧せられた。フヰンランドの婦人は國會議員たるの資格を得て居るのであるが、千九百六年の選擧には十九名の婦人が選れ千九百八年の改選には廿五名に增加した

婦人に參政權を與へてならぬとは男子が勝手に定めたることであつて、少しも尤もらしい理由はないのである。婦人は家政の爲にも忙であるといふ人があるかも知れぬが此點に於ては男子の方が一層多忙ではないか。男子の多數は毎日八時より午后五時若くは六時頃まで何等かの職業に從事し居るのであるから、日曜若くは祭日にあらざれば殆んど投票の義務を果すことすら出來ない。これに比ぶれば婦人は比較的多く閑暇を有して居る。投票の爲に一二時間を割く位は容易の事である。

然し婦人に選擧權を與へても被選擧權を與へてはならぬといふ人があらう。其理由は婦人の本職が家庭に在るといふにある。然しこれも取るに足らぬ議論である。男子にしても職業を求むることを好まぬ人は自ら進んで市會議員となり若くは國會議員となるが如きことはない。唯其境遇の許す人のみが議員の候補者に立つて居るではないか、婦人が被選擧權を得れば、家事を棄て、子女の教育を怠りて政治にのみ熱中するものだと思ふのは誤解の甚しきものである。吾人は斯の如き考へを以て女子參政權に反對する人の愚を憫まざるを得ない。

婦人は家事を司どるのが原則であるとするも殆んど全く家事に關係なき婦人の少からざることを記憶せねばならぬ、婦人には獨身者もある。結婚しても子を産まない婦人もある。子があつても、既に其子女を教育し終つた婦人もある。婦人は概して五十歳乃至六十歳に至れば其子女の教育を終りて比較的閑散の身となるものであるから、教育ある婦人はなるべく此時代に於て社會的活動を始むるがよい。常に家に在りて嫁イヂメなどするより、議員となつて公共の爲に盡す方がどれ程利益であるかも知れない。斯く考へ來れば婦人の參政權に反對すべき眞の理由といふものはないのである。若し其理由を知れる人があらば、吾人は謹んで其教を聽きたい。

片々錄

女學生

△凡ての事業は皆人格の反映なり。

△身、心を宰どるに非ず。心、身を宰どる也。此死するは、神が人を奪とりし也。

△商圖はせ吞む人格の感化は超然的人格の感化よりより多くの感化を與ふ。

△默々のうちに、感化されつゝある人を見れば今更行爲の不滿を想ふ。

△未來の理想に憧憬せるものよ、顧みて現在の我を見よ餘りに眞面目にあらざるとなきか？あまりに輕々に失するの弊なきか理想の端緒は現在にあり。この一秒時にあり。現在に忠なるもの、之即ち理想を成功すべきものなり。

△永遠の幸福、永遠の愛は屢々目前の苦痛を誘ふとあり。されど、安んぜよ、その苦痛と見ゆるもののは即ち自己の爲には、幸福と成功を齎らす最上のもの也

△長所に伴ふ短所をも天才に附隨する自然の結果としてこれをも誇る人の姿は見醜きものなり。

△眞理はすべてを抱括す。

△自由は最もよく活動す、故に靑年の活動性に合するもの也。

△平凡なる生活は、いかに困難なるかを思ひます。凹凸なき實に、坦々たる道を嫌惡せず。常軌を逸せず、眞實に進むとは偉なると同時に、又、奇技なる生涯のいかに強き意志と超絶せる意見とを要するかを思ひます。

△理想の死……私は一世のおもひでに人は忌むかの獄屋より、人は戰慄するでせうかの斷頭臺で殺されたと思ふ、あはれ、其時いかなる感想を致しませう、悲壯美ともいひませうか。弱者の楯となつて、世の いとはしき強者に對し、終に囚はれ人となつた晩、自己もまたなやめるものいためるものの生活につかる、弱者を虐げる强者の下に殺さる時は、いかなる感の浮ぶとでせう、人は最大の汚辱と考ふる斷頭臺上の死も自己にとりては愧づるとなく大神のみ心にかなひし生前の事業には、えみつゝ、我世をおはるとが出來ませう。けれ共かゝる死は偉人の死でありませう私共には到底望み得べきでないでせう。

△女子を保護する男子はいかに不幸なる事でせう、何となれば、男子一生の伴侶たる妻は女子であるからです。彼は一生侮蔑の惡感を抱いて居らねばなりません。

漢魂和才

和漢の山人

○東にし内外の書を腹にみて飢えし博士のある世なりけり

○よろづ卷せめて半をよみ終すはわかこの庵に許なふなゆめ

○村あれて御靈も乞はす最社やふれしまゝに乞食住むなり

○蜂の雄と胡蝶の雌とは自づから夫婦たるべく生れざりけり

○針の目を駱駝通らん世なりとも其ことわりのとふるべきかな

○飛ぶ露ともくるむくらと一つあなに住み得らるべきものならなくに

○あさなゆふな田うち草きり土かひていてきし米は我が飯とならず

○あさなゆふな蚕かひ糸とりはた織りていてきし帛は我か衣とならず

○あさなゆふなつるはしとりて闇坑の中にほりてし黄金我か財とならず

○聞く耳と見る目かく鼻みなとぢて無言の行をわれこゝろみむ

○白きにし日をつらぬきぬますらをが劍いだきて江わたるらし

○火の御神われにわれませ現し世のよきもあしきも稱たゆるまで

○黄金なす我が此の骨を鐵鎚のたゞ一擊にうちくだきてん

○すね人よなそさはすねる春は花秋は月夜のある世なりけり

○此のうたをよむとも聲な高くしそ鼠ふき起り鬼かみやいてむ

編輯餘錄

旭山生

（春ぎ去て夏きにけらしといふ節句と相成りました。一昨日[illegible]、青葉の[illegible]の仙[illegible]が[illegible]にくなりました。世界婦人[illegible]なぜ[illegible]しては割合に静も盛く、せうなせれば、梅、松、竹、藤、桐、楠な人と、[illegible]かの[illegible]に[illegible]少の風情な添へて居ります。其中に紅白の花が今を盛りと色を競ひ、を放ち、花あやめ、[illegible]なども其間に列をなして咲いて居ます。イチゴも二三ツ赤らんで來ました。先週時いた紅花夕顏、入塚藤草[illegible]と申す草も可愛らしい二葉な[illegible]し、野菊は猫けもお如く庭の一隅に茂りして來來の花の約束を[illegible]しく示して居ります。併し此中にて事務な[illegible]る吾々は[illegible]に[illegible]いて鑑賞として庭の中に職[illegible]せねばならず、到底一[illegible]松下、[illegible]ト人一などといふ風流は吾等の全て及ぶ所でありません

◎本號は特別に八頁と致しました、多くの投書ありて材料盛れ居るに拘らず、印刷の都合によりて頁數を減じたと、申譯ありません、御許しを願ひ上ます

◎福田英子氏の「婦人と宗教」[illegible]「西洋文學と婦人の[illegible]」[illegible]ロヤトキンの「動物の相互扶助」等は本號に限り休稿致しました。[illegible]夏花氏の「野の花」中田花朝氏の「[illegible]」福田[illegible]の「白薔薇」等の原稿は既に机上に來て居れども紙數に限りあれば[illegible]に相成りました

◎本號はいつもの通り十二頁に致しますから、讀者諸君はドゥぞ益々御投稿下さる樣願上ます

◎第一面にも記する通り、本紙に深い因縁を有する長谷川二葉亭氏の逝去は、實に哀悼の至りであります。小生は四年以前、氏がポーランドの革命志士ビルッスキー氏と共に我が僑居を訪ねた[illegible]に來訪せられし時、初めて氏の警咳に接したのであるが、之が初對面にして然も最後のお別れであります

◎内山愚童和尚は警察の警戒あまりに嚴重なるためにや曹洞宗本山永平寺に永く滯留する能はず、出で、京都附近に深く隱遁せしが、去廿五、突如として檢擧より來書あり中に曰く『今朝神戸より來書、出版物違反の件に付き今訊問を受けつゝあり』と。[illegible]今横濱の監獄に居ろ

◎先、例の谷中村殘留民の一人木野戸一と申す方は未だ老人といふ程でも無きに病を得て逝去せられし由、聞く所によれば、先い[illegible]の強制破壞な受けて以來今日まで[illegible]な[illegible]み居りし爲め、此頃に至りて漸く遂留民中に多くの病人を出し、木野氏も即ち其一人なりと申すとであります。殘念なとには、本紙が學術雜誌とありし爲め、非業の事實を評論するとが出來ません

◎婦人解放と申すとも、此頃は少しく人の注意を引く樣になつて參りました。[illegible]多數の人々は隨分[illegible]な意式な考えを持つて居ますが、併し其人々と雖ども、此婦人解と運動とか決して輕々に[illegible]過すべきもので無いとを感づいた樣子が見えるのは喜ばしいとであります。[illegible]併し其形勢を見て以て獨て保守方面の學者が驚へられては實に喜ばしいのの話ではありません。嘆だ〳〵青年女子諸君の[illegible]な促す[illegible]でありたす。併し又、此解放てふとが實際運動とならんか、本紙は之に對して一言を以てし難動する[illegible]自由を持ちません。本紙は既に學術雜誌であります。一月以來保證金が無くなつたのです。[illegible]へば心細い譯ではありませんか

◎中村[illegible]木兄の『自由思想』第一號は秩序壞亂の件を以て發賣禁示せられました、まことに氣の毒の至りです

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

伊三坊（二）

木下尚江

（三）

歸らうとすれば、隠居は源家の顔を向けて「どうぞ居て呉れよ」と言ふ、彼の林檎のようなおかみさんは茶を入れて呉れる、此の取込みの心配の中で、甚だ心なき業のように思ふたが、強いて歸るも亦た惡いような氣がするので、林檎のおかみさんと火鉢を中に差向ひで、お茶の御馳走になる。

林檎のおかみさんは、なか〳〵能く辨ずる。先づ此の家の御亭主の能く稼ぐことを辨じた後、更に自分の亭主の批評に進んだ、自分の亭主が正直過ぎて、常に損ばかりして困まると云ふのだ、三郎君は熱心に、其の正直過ぎるとの難いとを説法すると「先生様は何でも御承知下さいますが」と、おかみさんは笑ふ、若かき三郎君は實に此の界隈の先生様だ「正直を申しますれば、前には餘り正直なので、何だか意氣地の無いようで、物足らなく思ひましたけんど、只今では、正直な方が可いと自分で氣がつきました」

そして彼女は、自分が正直に限ると氣の着いたわけを遠い田舎辨の早口に語つた、彼女は曾て近所のおかみさんに勸められて、五厘出して、始めて「ちいはあの」札を買つた、すると其の夕方に五厘が二十三錢になつて戻つて來た、そこで今度は一錢に殖やした所が、四十八錢になつて戻つて來た、此方が増して買へば戻つて來る利益も益々殖えるので、面白くて〳〵堪まらず、更つて戻つた利益の全部を擧げては買ふことにした、トン〳〵拍子に儲かつて、遂に十圓の利益を得たそこで更に大奮發、十圓の札を買つた所が、今度はフイで到頭まる損になつて仕舞つた。

「成程、慾は働くもので怖いと思ひましたよ」と、赤い顔に割れるように笑み傾けながら、お茶を注いで呉れる。

室の中が何時しか薄暗くなつて來たので、暇を告げて出た。

「お隣ちやん〳〵」と母の懐中で呼ぶ聲が遠くまで胸を刺すように響いた。

（四）

日は早や沈んで寂しき履雨を背に天王寺の五重の塔が薄黒く立つて居る、夕靄の黒身に沒む空を、上野の森さして鴉こ歸つて行く。

東を見返へれば、發電所の烟突は、いざ是れから我が番と言はぬばかりに、勃然に黒烟を噴きまくる、製絲所のも終業の時の近くので忙がしそうに吐き立てる、あゝあの煙突の下に伊三坊の父は眞黒になつて働いて居るのだ、我兒の危篤の心に懸らぬとも無かろう、早く歸つて顔を見たいと、如何ばかり氣の急くことであろう、けれど終業の笛の鳴るまでは歸ることが出來ないのだ、無理に歸つて歸れぬとも無いけれど、其の代り日給五十錢を棒に振らにやならない。

其の翌日、伊三坊は遂に全く昏睡状態に陥ちて仕舞つた、そして遂に呼吸もせず、脈も搏たぬ全く冷たい身体になつて仕舞つた。

父が自分で觀音經を讀んで、心ばかりの葬式は營まれた、小さい棺は彼の火葬場に擔いて行かれて、夜半一片の煙になつて仕舞つた、掛る費が一圓五十錢、父の汗水三日分の給料だ。

稍や過ぎて後、「お隣さんは何と言つてるね」と、三郎君に尋ねて見た。

「諦めて居るんでせうか」と三郎君は首傾けながら「思ひ出すのが却て辛らそうに見えますから、僕も默つて居るんですがね」

（をはり）

女の幸福

文子

或日我家に女はどんなのが一番幸福だらうと云ふ問題が起つた、來合せて居た從弟は此家のおばさんの様なのが一番幸だらう、父は此上なしの善人、財産はあり、自分の思ふ様にならぬ事は一つもないからだ、自分は見え坊の母が、質朴素野な父を眞に愛して居つたかしらんと思つた、姉と母上は珍らしい美しき衣服の作らるゝが女としては一番幸福の様に思はるゝならんと、さらば呉服屋の細君は最大幸福者でしやうと自分は笑つた、曰く醫者、曰く辨護士、曰く商家、曰く農、出てゝは反對、又反對遂に別に何が羨ましい事もない、やはり自分が呑氣で一番よいと姉は云ふ、華族、皇族さて別に驚く程おもしろい事もあるまいと難かゝ云ふ、姉は又さりとて佐倉宗吾の様にいくら人の爲でも、妻子まで火あぶりになるのもいやだし、と既に自分を評した、自分は思つた、女は單獨に女として評する事は出來ぬかしらん、夫の身分により幸不幸が分るゝか、どこまでも附屬物視せらるゝ敗と。

自分は幸福の標準は衣食以外何物にも趣味を解すると、如何なる職業にも趣味を以ちて生活し、天地自然の風致にも人生の情緒にも、渇したる人の水をあてがるゝ如く憧憬るゝ事の出來るが一番幸福ではなからうか、若し夫れ夫に對しての幸福ならば愛情本位の自分等には地位身分財産などは何等の關係なく、たゞ情に於て滿足すれば足ると、さればこそ求めて苦勞する身分の如きは一生を脱れる根本の如く骨肉、知人よりは不憫がらるゝにもせよ、情に於て滿足せる自分は却つて常人の得しらぬ幸福を自覺しつゝ誇りかに思ふ、如何ばかり他人の眼には幸福ならんと察せらるゝとも其の愛情なき生活はいと憫むべき哉。

大分耳が痛い

村田四郎

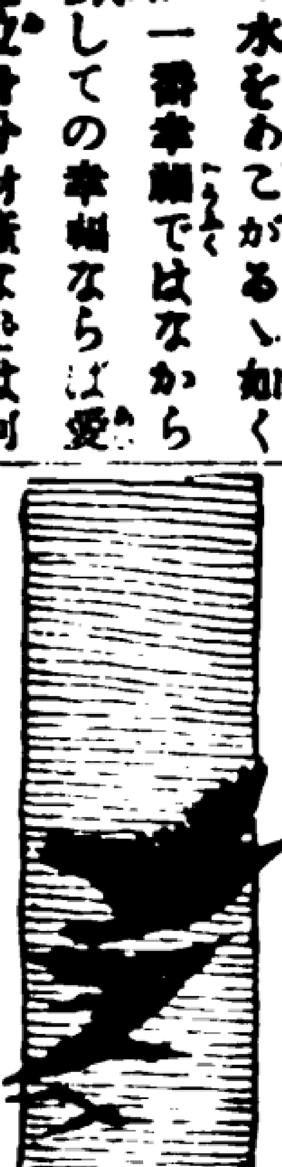
今度の「哲學を捨てよ」、大分耳が痛い、アハない日が續いですがネ、けれど少し不服も御座いますれ、哲學は無論の事だからいけないあんて仰つしやいますけれど、科學だつて矢つ張り個々の經驗的事實丈けを取扱つて居るのぢあ滿足しきれなくつて、種々の假設的事實以上に理法だの法則だのてしのをデツチ上げるんぢやないでせうか、引力説だの進化論だの、エトムだのエチールだのツて皆んな抽象的な概念ぢあないでせうか。哲學が人を社會的にすると云ふ仰せたも少し不平です子。へへ、議論を初めちあ大變だ

併し哲學は實驗に任せれば力を得ない、宗教を得ない、とは存じます。其れには哲學を捨てる位の意氣込でなくてはいけないかも知らぬと存じます。何に致しましても人生は只實ぢやない、實の様に斷へず種々な刺激に襲はれて居りますれば絶へず事實を以て之を戰はねばなりませぬ

月の初めから家兄の病状が又惡くなりましたので、僕まで氣が落ちなかつたり何ぞして昨朝から僕もしくじつて居ります。ドーも弱い。身も共に心も弱い。願ひ、願ひ

男へ、僕は常に負け通しです

大兄よ、私の願ふ者は捨てず、常に向上進歩の御教導を願ひます、切に願ひます（四月廿一日石川兄）



死別

旭山人

聲絞りて
幼兒床に泣きうめく
あゝ痛いよ、あゝ熱いよ
手を執りて
祈り泣く妻や見守る時
氷嚢易りて息つく父
無念なり
父母はあれども醫藥なし
判斷つとも錢は出でず
無慙なり
革命志士が世のなりはい
我より可愛き我が子病む
刻一刻
日脚かたむく黄昏時
泣く幼兒の聲や悲し
あゝ悲し
千萬歳に相遇ふ血統
會ふて別るゝ千萬歳!!

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思ひ浮べる歌(一)

村田犀川

○

つれなさも思ひかへしてさらに又命あらばと身を祈るかな　梶子

戀する婦人のこゝろを言ひ表はして餘蘊なしといふべき作で、この歌を收めたる梶の葉には「依戀祈身と云ふことを」と云ふ題がある、命だにあらばまたわか戀ふる人の今のつれなさが後のさゝめきに變ることもあるであらふ、否戀人のこゝろに曾て自分は住だものを、さりながら今の餘所〳〵しさはそれは一時魔のものに惑はされたのだ、かならず何時か覺めてわが眞情の通じあゝかほどにまで自分を思ふて與れたかと戀ふる人の眼より涙の玉を見ることもあるであらふ、考へて見れば自分はどうしてもあの人に見換らるゝやうな婦人ではない、思ひ詰めた時にもこう考ひて來ると人知れぬこゝろのよろこびがはゝゑみと變ずる、婦人の誇りそのものが三十一字のうちに躍動して居るがおもしろい。

梶子は京都祇園南茶店の女、有名なる百合女の養親で寛永中日々參詣の人に茶を鬻ぎその一生を風流に送つた、その歌集梶の葉は江戸の人なにかしか彼女を訪ひ、强て請ひ受けて出版したものと傳へられて居る

○

怨みすや浮世を花のいとひつゝさそふ風あらばと思ひけるをば　藤原俊成の女

新古今集春の部に題知らずと出て居る歌で、花は浮世を厭ひて誘ふ風あらば見すてぬべらではあるが怨みである、といふので……、さて咲く花の盛りは一時やがては散ると云ふことを知りてや知らずにや、花の開くは人に賞でられんが爲めではないか、いな花は季到りて自ら笑むものを、わずらはしい人々の詩に歌にと自ら好んで物思ひをするのである、それがかゝずらはしと誘ふ風あらばはやくも地にその身を委せんとするのであらう、然しながら花も浮世を厭はしと云ひながら風を待つて散らうとする、こゝろなの花すらも猶かくの如く遂に獨り孤なることを好まない、媚ぶる世のわかうとは厭はしけれど、さりとてわが爲めには己を虚うし得る人であるならばそれをわれはいなとは云はじ、さるにてもたはれたるわかうとはたゞ花にまつはる蝶のごとさかりを賞で、やがてはともに散らなんとをねがはぬことが怨みである、一雙涙滴黃河水、顚得東流入漢家で、今日で云ふならば老嬢の嘆も見へて興の多い歌である。

世はこの作者が姿色人に優れて美はしく父の血を享けて敷島の道に巧に、かつ機智に富むで居つたことを傳へて居る、それやこれやを思ひ合すれば、この歌は今猶作者のキビ〳〵したありさまをば髣髴たらしめて居る。

○

世の中をなになげかまし山櫻花見る程の心なりせば　紫式部

紫式部家集にある歌で、出櫻は作者自身にたとへたので開く時が來れば笑みもする落つる時が來れば散りもする、しかし山櫻は開落只四季の序に從ふのみで世とは何の關りもない、また花時が來たと云ふて思ひ出したやうに花見を仕様と云ふやうなムードであるならば、世の中を何に歎かう世相に超越すると云ふやうなムードでゐればこそ、世の中が歎かるゝ、……あゝ求めて自ら苦しむことのわれながら愚しさよと云ふ意のほの見ゆることにて、作者の人となりか一層ゆかしい感じがする。

作者は誰も知つてゐる通りであるかアストン氏はその文學史にリチャードソンに似て居ると云つて居る。

消息集

▲加藤米司氏(小樽)

北海道に參り候て足掛四年に相成申候、此頃からぬ年月の間、都の知友より絶えず惠送されて居る月刊雜誌は世界婦人と基督教新報に有之候、しかも不思議なるは兩雜誌とも失禮ながら維持に多大の困難を感じ居らるゝ樣な點見受けらるゝ事に御座候、……世界婦人の裏面に於ては人知らぬ御苦痛さき御事と遙察致居候、石川兄と愛姉の御奮闘振に見るやうに候、世界婦人に對する小生の感想を有体に申せば『健げなる心を有する親しき朋友』なんどの如くに候、御惠送の雜誌を手にする時は『ア、また無事であつたか』と平生懶惰の手紙も出さゞりし身の顧はれず胸の嬉しさを覺え申候、今後とも只御健在を祈る(福田寛)

▲長加部寅吉氏(群馬)

『世界婦人』三十六號拜見いたしました。誠に記事も豐富で紙も體裁して居りまして、心强う覺えます。たゞあなたの御文章が近來隱れ勝り拜見出來ませんのを心淋しく覺えます。本號で某猶驅者に答へますそうで、うれしく嬉しみに致して居ります。どうかウント、あゝいふ古い頭の人を打ち懲らして下さい。石川君の「哲學を棄てよ」「修養論を排す」には大贊成です。然ういふ堂々たる大議論に接すると溜飲の下る心地がいたします。反對などして來る奴は片ッ端からビシ〳〵遣つて〜ーておやりなさい。長谷川二葉亭君の死は、眞に國家の損害でしたれ。あの人は單なる文學者ではありません。あの人の露西亞文學から受けた感化は、什麼しても我が國に近い主張を持つて居られた事と存じます。返す〳〵も遺憾な事でした。(五月二十一日)(福田寛)

▲堺ため子氏

手前にかまけましてツイ御無沙汰いたして居ります。過日は[illegible]、御蔭有難う存じます、書籍の事に就きましていろ〳〵御手數かけました、御序での節にはチト御立寄り下さいまし、御承知のやうな丁度私の力だけの業(記者曰、ため子氏は獨立して裁縫業を始めたり)をやつて居りますので心持はまことに愉快に送つて居りますから、どうぞ御安心下さいまし、福田樣にもどうかよろしく御傳へ下さい(石川寛)

▲内山愚童氏

石川兄足下、健在なりや、貴は去る十五日國府を出で名古屋に於て石巻兄と中日の鯛を食り、直ちに越前の山奥へ逃げ込んだ、こゝに一二ヶ月參究して、京都、大阪、高野、奈良等に遊び、六月下旬、一たび歸山し再び東京へ出づる考へに候、東京の同志の狀況御報道を乞ふ、福田姉にも宜しく申上て下さい(永平寺より石川寛)

▲内山氏二信

永平寺にて世界婦人を手にするを得ずしてボリスと共に湖水を渡り、今此山(比叡山四明嶽)に登る、昔は平相將門及師を下瞰して何と言ひしか、今……内山愚童此山に登りて將來を期す、貴の傍に今朝より勞働しつゝある一人あり、彼は何ぞ、曰く彼の職務はボリスなり、紀念の爲に送る(五月十九日石川寛)

▲西川文子氏

先日は御西下被遊候よし御歸りには御立寄下さる御事と新緑の裝ひにでも御供申上んと心まちに致し居候に、いつまでもとんと御出下されず候ひしは、もはや御歸京遊遊候にや、私共の京より歸りてより、萬事はしか致し、やう〳〵快くなり申候、今日は引つゞき靜かにうつり申し、つきゝりにて誠に閉口致候(五月二日福田寛)

▲田中柏頼氏(横濱)

久しく御無沙汰致しました、目下御病居如何、福田様にも御替りなく候や、當地同志も一同健在ですが、本月二三日の比より警察の壓迫は非常なものにて、小生方附近には刑事の屯所が出來て常に小生宅を監視する事となり他同志にも銘々一人宛附隨し、其他荀くも同興味ある者は草を分ける樣にして物色するの傾向あり――過日山手警へ呼出され警長との對話中少しの間の行違より直ちに拘留十日の處分言渡と云ふ始末、直ちに正式裁判は請求しましたが實に物凄言はん方無し(五月廿二日石川寛)

▲渡邊政太郎氏(麻布)

一昨日は御繁忙の處を御邪魔致しました、昨日はまた福井君の件に就て種々御周旋を下さいまして難有存じます――昨夜は喜興君が兵營訪行ひに來られたが小弟夜店を出しに行き、不在で逢ひ會ひませんで、殘念でした。小弟今から鉛屋に出て行くのであります。(二三日石川寛)

▲大和田忠太郎氏(横濱)

當地同志は、東京に於ける秘密出版物事件に關して嫌疑を蒙せられ、五六の同志は尾行巡査を附せられ、小生の如きは日々商館への勤務にも尾行巡査を逐週し、勤務中は外に見張り居り候、彼等が警戒する程に吾等は何等の活動もなし居らざる次第故甚だ氣恥かしき譯に候、田中君は、知らざるが故に知らずと答へしを、白狀せざるなりと決定して、廿日間の即決裁判を申渡され候に付、目下正式裁判請求中に有之候(五月廿二日石川寛)

▲舟木一義氏(土佐)

其後は打絶えて無音のみ仕り今更何とも申譯なく深く恐縮に不耐候、御兩君如何御渡遊候や、御消息更に知るに由なく日夜案じ上げ候、小生も東奔西走パンに追はれつゝ、孤獨の身は通信に非常なる不便を感じ申候、[illegible]よりの通信にて承り候得共御母堂樣御逝去の由打驚き申候、嘸々御愁傷の御事、セチ辛き濁世と苦戦惡闘の央ば御悲嘆一入の御事、彼れ乍らお悼み申上候……高知市に於ける楠瀬きた子とか申す御婦人、地方の人は呼んで「民權婆サン」と申居候、今年七十五才の高齢とか、往昔、時の政府を辟易せしめたる女丈夫の由、板垣氏等とは御別懇にて、ルーソー氏民約說を愛讀せられ候とのことへ(福田寛)

▲鈴木千代己氏(釧路)

内外共に御多事なりしにも係らず、御元氣にて御奮闘の段たゞ〳〵敬服の外無之候、自己の天職を覺らず徒らに事を逐ひ、虛を競ふて之れ事とせる現代婦人程憐れなものは無之候、北米の婦人が英國の貴族と結婚せんが爲めに持參する資金は甚だしきものに有之候由、虛榮も之れまでになれば大したものに候、彼の徒人を驚かせし電小僧が婦人を弄して成功? せるは能く其缺點を知悉せるの致す處に可有之候、虛榮と奢美とに眼くらみ自己の天職を忘れたる數人の婦人は遂に電小僧の眞情を識るの明を得ざりし事のなさけなく被存候、之れ誠に現代婦人の爲めに生きたる教戒に候(四月廿九日福田寛)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

喜劇　伯父か甥か（四）

シルレル作
紳崎沈鐘譯

第八場

富士武夫　英子、菊江、

菊江（驚いた樣子）「オヤ――お父樣――」

英子「菊さんは何をして居たの、お父樣のお歸になつたのに、早くご挨拶をなさい」

富士（挨拶した後に向直り）「達者であつたか、其れが人間の幸福ちや」

英子「菊さん――結婚は大變なことになつてよ、お前はまだ知るまいが」

菊江「えツ、何でございます、大變とは」

英子「要樣は亡くなられたの」

菊江「マア、武夫樣が」（驚いた樣子）

富士（菊江を凝視め）「菊子、お前は何うする意りかね」

菊江「妾は――お父樣――眞に武夫樣はお可哀想に思ひます、そしてお父樣がお定になつた結婚の日が少し位延びたからつて、別に悲しくもないわ」

富士「ムウ、能く解つて居る。何か結婚に就て氣に入ないことがあつたら言はなかつた、決してお前を無理に押付けるやうなことはしない意りだ」

菊江「それは知つて居ますけど、何だか」

富士「其の何だか良ないのだ。お前の心の底をお父樣の前にブチ明けて仕舞へ」

英子「菊さんお父樣に遠慮は要ないよ、お前の思ふやうにして下さるのだから、サ早く――隱さずにお話し」

富士「菊、お前は武夫を愛して居るのではないか」

菊江「イエ、左樣ではないけど」

富士「ヂや矢張りお前の愛して居る人の他は誰とでも結婚しないと言ふのだらう」

菊江「………」

富士「そうだらう、其れでは誰を愛して居るのだ」

菊江「お父樣妾何だかきまりが惡いわ」

富士「そうか、きまりの惡いことはない、もつと此方にお出で、誰を愛して居るのだ」

英子「菊さん――お父樣に話すのに、きまりの惡いことはないでせう、早くお話し」

富士「お前の最も愛して居る戀人、又お前が最も愛せられて居る戀人と話をする時のやうに、遠慮なくお話し」

菊江「でも何だか恥しいわ」

富士「其の戀人は若い人か」

菊江「若くて、賢くて、妾の最も尊敬して居る人、而してお父樣に顏が似て居て、親戚で、苗字も同じ富士、お父樣的てご覽なさい」

富士「父樣に似て、親戚で、苗字も同じ富士とうも解らないね、菊子」

英子「アヽ――貴方判りましたよ。從兄の武夫樣では無いでせうか、妾左樣思ひますわ」

富士「どうだ、其れに違ひ無いか」

菊江「お父樣どうぞお免下さい」

富士（自分の喜びを忍びつゝ）「さうか、何故早く話さなかつた、マア一應熟考して見よう」

菊江「別に熟考なさらなくも、武夫樣は立派な方で被入ることは、お父樣だつて御存じでせう」

富士「彼はね――輕卒な奴で、不人情な奴だ、彼方へ行てもう二年にもなるのに、唯だ二度しか手紙を書なかつた奴だ」

菊江「でも妾には度々お手紙を下さつてよお父樣」

富士「さうか――武夫から手紙が來るか、而してお前も直ぐ返事を書いたか」

菊江「えツ――お手紙を頂いた時は、何より嬉しうございます――お母樣どうぞ妾に代つてお話して頂戴――妾厭よ」

英子「貴方、何も考へなくも可いではございませんか、兩人の氣が合つて居れば、一緒にしても差支は無いちやございませんか」

富士「ムウ、其れはそうに違ひない――兩人とも同等に財產もあることだし、武夫は少々放蕩者ではあるが、結婚でもしたら家庭も圓滿に行き、互に愛情があれば結婚は若い者の生命だからね」

菊江「眞に心から、愛して居ますわ、お父樣、最初淺間樣と一緒になれつて被仰つた時妾悲しくて、武夫樣が慕はしかつたわ、――武夫樣となら嬉しくてよ――けど妾の思つて居る程武夫樣が思つて被入るか知ら」

富士（嬉しさうな樣子）「何うして、思はんどころでは無い、（自分で胸に考へつゝ）菊子喜べお前の云ふ通にしてやる」

菊江「お父樣――眞なの、定とですねお父樣、では直ぐ武夫樣にお手紙を書いても宜くつて」

富士「さう急がなくも可い、武夫の心を聞きたければ、父樣から聞いて上げる」

第八場

前役、春子、森太使者の裝束で鞭を打振りつゝ登場

森太「ハ、ヽ」（呼吸絕え〱に）

春子「オヤ――大變急いだ使者が來たわ」

英子「マア、森太だわ」

菊江「武夫樣の馬丁だわ」

森太「旦那樣、奧樣、アヽどんなに急いだか知れん――時に菊江孃樣は、淺間樣の奧樣にお成りなさつたでせうか」

英子「イエ、まだですよ」

森太「アヽ左樣でございますか、南無三寶好い時に參りました、此れで旦那の生命が助かります」

菊江「何うしたの、武夫樣が何うしたと云ふの」

英子「病氣では無いの」

春子「兄樣が何うしたと云ふのだらうね、眞に心配だわ」

森太「奧樣――で心配なさることはございませんが旦那はお氣の毒な境遇になつて被入るのでございます――奧樣、貴女がお聞きなさつたら必定お許し下さることゝ思ひます、旦那は唯だ――奧樣、貴女ばかりを杖とも柱とも思つて被入るのでございます、何卒旦那の心を哀れと思召して下さいませ――此れが旦那からの手紙でございます、早くお讀みなさつて、旦那の生命をお助け下さいませ」

富士「何うしたと云ふんだ」

英子（手紙を讀む）拜啓不取敢一書進呈仕候承れば菊江樣には御結婚遊るとの事に候時機既に去つて誠に臍を噛むの悲境に陷り今更如何とも致方無之候得共豫てより手紙も度々往復致互に心も知り合ひたる小なれば若し菊江子樣に於て、淺間氏に對し十分の愛情も無く或は不滿を感ずるが如き事有之候節は是非小生と緣の糸を結ばれ度一偏に奉懇願候不幸にして此の切なる希ひの容れられざる時は最早此の世に生きながらへて空しく月日を過さんよりは寧ろ下界の鬼となつて冥途の門に御待ち申すべき他好き考へも無之候得ば何卒小生の哀情を御懇察被下度候何れ小生上京の上篤と陳述致すべく候先は下僕森太へ托し御懇願に及び候也

富士御伯母樣　富士武夫

英子「武夫樣のやうな親切な方は兩人と無いわ、何と云ふ親切な手紙だらう」

春子「眞に兄樣はお氣の毒だわ」

森太「其れはもう旦那のお力落しは非常なものでございます――さうお憂ぎなさることはございますまい――と申しますと急で行け、若し貴樣が後れて結婚が出來なかつたら首は無いぞ、と被仰るのでございます」

富士「武夫が馬鹿者には困つたものだ」

森太「旦那樣貴下は旦那樣の伯父樣でございますから。どうかご同情をなさつて、宜い方にてお取計ひを願ひます」

春子「森太は眞に忠義者だよ、兄樣の事たら命懸けになつてするんだよ」

英子「森太マア彼方へ行つてお休み、疲れたやらうね」

森太「ハイ、難有う存じます、では暫く臺所の方で」（去る）

第九場

富士、春子、英子、

富士「菊江お前は何うする意りだ」

菊江「妾は何うでもお父樣の被仰る通りにしたいと思ひます」

富士「何うしたら好いかね」

英子「何も困難しいことは些ともありませんわ武夫樣も折角親切な手紙を下さつたんだし菊江にも不足も無いやうですし、好い機會ですから兩人一緒にしませう」

春子「でも兄樣が被らなくては」

英子「手紙の趣きでは直ぐ後から被入るさうでだ」

富士「英子、私は軍隊に歸らなくてはならぬから、結婚の事は萬事お前に一任するが好いやうに取計らつてお呉れ、先づ安心した、結婚は可成く早い方が可い、私は騷動が五月蠅くて勝らないから、直ぐ出發するオイ、誰か呼べ」（つゞく）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

我が信、我が神、我が道

(二)　添田生

○

「汝は奇跡を信ぜざる乎」と云ふか、否僕は主の跡を信ずる。然し奇跡は、花咲老爺の如く枯木に花を咲せるとのみではない「瞽者は見、跛者は歩み、癩病は潔まり、聾者は聞き死にたる者は復活さる」。是れは勿論奇跡である。されど吾人は一ケの單細胞が母胎に住る十ケ月の其急激なる變化は奇跡にあらずして何んであらう。一粒の種子が地に播かれて初めは苗、次ぎに穗出で穗の中に熟したる穀を結ぶ。見よ神の力を吾人は科學を信ず。而して偉大なる神の奇跡が其中に顯著なるものを見るではないか

既に處女の懐胎を否認する僕には、彼の復活論は何の功能もない。彼の復活が若しありとすれば、花は靈に於てゞあつて決して肉に於てゞはなかつた。

基督教が肉の永生を云々する其根據は其復活にあるのだ然し僕はそれを信ずるとが出來ない。吾人の永生は其子孫に於て美はしく完成されて居るではないか。

○

僕は斯く今日の基督教正統派を以て任ずる教會の信條を全々否認したのだ。而うして始めて知つた、イエス神性は彼の肉ではなくして彼の尊き人格にあることを「太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神なり」而うして此「道」は何人の胸の中にもあるのだ。皆神の子だ。アバ父よと呼ぶ子たる者の靈は何人の胸の裏にも同樣にある。其の自己を知ると知らざるとの違ひのみである

人は此眞我を知らなければ駄目だ「父と我とは一なり」此自覺に入らなければ所詮駄目だ。

主觀的には眞我の發展である。客觀的には神の靈氣に滿ちたる高き人格の人となることである。

今日までの一切の疑惑は解決された。僕の喜悅は非常なものであつた。されど其喜悅は實に瞬間であつた、僕は自己の人格の劣等にして、而かも罪業深くして救ふべからざるものあるとを發見した。過去に於ける僕の罪惡觀は頗る淺薄であつた。

嗚呼悲しい哉、昨日春陽花咲く下に逍遙したる僕は今日秋風荒寞たる荒野に迷ふのではないか。

幾度か祈つた、幾度か泣いた、夜陰靜にして人定まりたる時獨り蒼天を睨で慟泣した僕の目前には死の河と滅亡の海が横つて居る。噫如何にしてか此悲境より救はるゝであらうか。

○

僕が涙の中から始めて悟るとを得たのは是である。

「神は愛なり」「義の神」「怒りの神」は舊約の神である。ナザレのイエスに由つて宣べ傳へられたる神、然り、汝の敵を愛せよと敎ふる新約の神は、無限絶對の愛の神である地獄などと曰ふものはない。ヨシ有りとするも神は吾人々類を斯かる所に滅し給ふ樣な酷なる。神ではない神の愛は吾人が悔い改むるまで忍ぶであらう。吾人が神を信ずる所以は地獄の滅亡を恐れてゞはない。父の罪行を痛め奉るに忍びぬからである。

唯神に感謝す。自ら省みて罪人の首と歎ぎ、天父を仰ぎては神の子と叫ぶ。此矛盾したる、二個の思想は愛なる神によつて始めて統一されるのだ。其處に矛盾即非矛盾、差別即無差別の無對境がある、其處には向上がある　發展がある進歩がある、神の完全が如く完全くなる信仰がある、希望がある、實に尊い眞理ではないか。

人は基督教だ、佛教だ、孔子教だ、回教だ、やれ自力だ、他力だと曰ふ。然し僕には何教も無い。「道」は唯一つである、絶對である。唯ナザレのイエスが宣べ傳へられたる宗教が一番よく此尊い人生觀を僕に敎ふるから僕はそれを信ずるまでのとだ。

主觀的に曰へば「眞我」の要求に向つて進むのだ。客觀的に曰へば「眞我」の本源たる神の旨を行ふのだ。自然主義と云ひ、本能主義と云ふ。畢竟人生の虛僞を破壞する「眞我」の絶叫に過ぎぬと思ふ。

唯僕が曰ひ度いのは「眞我の要求」は今日の自然主義者の主張する樣に決して肉に於ける方面のみではないと思ふ。確かに靈的方面の要求がある。而うして其要求は神である、人格である。此靈と肉との要求か圓滿に調和されたる人格が尊いのだ。宗教の終極目的は實に此點にある樣に思ふ。

○

人格の宗敎是れは永遠不朽の道である。何者の何時如何にして、善く此不朽の道を破壞するとが出來やう。吾人の信仰は實に此處にある。希望は此處にある。而して吾人は此れが實行者たる愛の人でなければならぬ。

若し是れが不動の實驗の上に立てられて居るのでないならば、如何に神學、哲學の論旨は滔々たるも未だ以て宗教の門外漢と曰はざるを得ない。

唯此れを得るの道は新らたに生れるとだ。小兒の如くなるとだ。至誠の人と成るとだ。(おはり)

おわさ

晩菫

おわさは私の内の子守りだ。彼の女は横の野原を縱斷してる妙義街道に添ふて建つてる、二階なしの小さな板屋に呱々の聲を擧げたんだ。兩親の間に三人の娘があつて彼の女は一番末の子だ。

貧の壓迫に堪えられなくてか、但しは夫婦の仲の睦まじくなくなつてか、一夜おわさの父は、まだ母の乳房を搜し求ふ彼の女を負ふて家出をし、とある林に棄て見ごしといて、何處へか飄然と踪跡を晦らまして仕舞つた。

翌くる朝林の中に泣き叫んでたおわさは直ちに母の家に連れられて來たが、既に父のゐなくなつた彼の女の家は、母の瘦せ腕一本となつて、膝に縋る三人の子供を、如何ん共扶持しやうがなくなつた。

其處でおわさの母の母は、隣村の金持ちに髮を丸めて、なく〳〵と其の家に御輿を据え込み、臍繰り金を拵えてはおわさの母を助けてゐた。

おわさの母も氣丈な器用な女の事とて、色々賃仕事や、野良仕事やをしてカツ〳〵細い煙りを立てゝゐた。

でおわさ等の姉妹三人は、或は母の機業の邊りに、或は野良仕事の邪魔をしながら野猫のやうに生ひ立つた。そして大きい方のから順々と、碌々學校にも遣させられずに、皆他人の家に貸し出された。

おわさが私の内に子守りに來たのは、昨年の秋で、年弱のまだ九ツだつた。横太りした娘ではあるが、丈が低いので、人並に越して大きい内の子を負ふつてる所を見ると、そゞろに哀憐の涙を湧かさないでは居られない。

然し「ふつかさん、内に行きたかないか」と問へば、「い、え、こツちの内がいゝ」といつてる。思ひ切つて諦めの善い方の娘らしいで。子供をも可愛がつて大事にする。

私は泌々いとしいものだと思ふ事がある

おわさはよく謠ふ。歌の數を知つてる事も夥しい。またよく遊ばれる。下駄など大概踏み破つて仕舞ふ。同年輩の連れが皆誘ひ合つて每日學校へ登くのだもの、一人取殘されて淋しい彼の女に、謠はないで遊ばないで居られやうか。肉親の人が見たらこの樣にも涙を滂沱と流す事であらう、

恁かるおわさに、唯だ一個妙な癖がある。

今年一月、新らしく拵へた金錢出納簿が、柱の釘から外れて落ちてゐたら　チヨツト、ちよろまかして自分の風呂敷きに包み込まふとし、姉に見付けられて叱かられた。

つい此の間の事だ。妹が餅棚の上に載つけといた卵鷄が一トツ無くなつた。「誰れか取りはしませんか」といふが、誰れあつて取つたといふものがない。そんなら猫の仕業だらうと、猫に罪を被り付けて置いた所が、これもおわさが取つて飲んだといふ事が發れた。そしてまた皆に叱かられた。

皆は手癖の惡い子にしたくない、善い子にしたい。といつて本氣になつて叱かつた。私も無意識的に、「惡い事するなよ」といつた。

が。果たして　それ等の事が惡い事だらうか。餘所の子供が玩具を持つてゐれば、おわさだつて帳簿の紙位持つてゝつて、對抗的に遊びたくならうではないか　また大人が菓子の摘まみ食いするのを見れば、彼の女だとて鷄卵の一トツ位吸つて見たくならうでないか。

「善い事」といふ言ひ事が何處にある。「善人になれ」とは、都合の善い奴隷になれとの意味だ。「下駄なんか破いたつて善いぢやないか。

私は向後全くおわさの自由に放任する事とした。此の約束もせまいと決心した。餘計な干渉して殊勝がるのこそ大禁物だ。覺つた。既成宗敎や舊道德やに何時往々囚へられてる事を、私は深く愧ちた。

夕暮れ陰深き木下闇に、鳥か淋しく鳴く頃、「幾ら私が貧乏人の子でも、馬鹿にされれば、腹が立つ」などいふ俚謠を節哀れに謠ひながら家路を戻つて來るおわさを思ふと、痛切に泣けて仕樣がない。

私は子守りの解放といふ事を熟々思つた

(五月二十二日作)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

排哲學に就て(二)

(石川大先生の教を請ふ)

かの子

五

大先生は頻りに宗教を破り給へども、
「宗教は火なり」といふの外、之に就いて宗
教とは如何なるものなり如何なる範疇ま
でを宗教といひて可也との說明を與へたま
はず候。眞の宗教は哲學即ち理智をも
包容して缺くる所なきものには候はずや。
苟し然らずして唯情の動く所にのみ委せん
か、宗教となり「情は他人の爲ならず」てふ偏
愛に陷り又は醜惡なる迷信に沈淪するが落
にて候。
大先生又曰は　やう「宗教家」面目は
眞心に世の爲に働くにあり」と。妾の宗教
家觀も實に左に　敬服致候へ共、哲學を
排せらるゝの大先生の立場よりしては、何
故に世の爲に働かねばならぬかがわからぬと
いふ理由に於ては　哲學の力を借ら
されば完全なる答は難かるべしと存ぜられ
候は如何にや。但し情の欲する所已むに已ま
れず世の爲に働くにありと宣はゞそれ迄に
て候。併しながらそれに致しても何故に人
は情の欲する所に從はねばならぬかと反問
いたしたく候。茲に至つては哲學の
範圍內に屬し候はずや。高見如何。
遮莫、宗教とは如何なるものにして如何
なる要素を具備して可なりやの具體的說
明を仰ぎたく、然らざれば大先生が宗教破
吹論は側耳に入り難きの嫌有之候事　恐ら
くは妾一個に止まらざるべしと存ぜられ候
まゝ深く御願申上候。

六

兎に角妾の者は強ち宗教を排して哲學に
趨るべしとの意見には毛頭御座なく、されはと
て景慕する大先生の排哲學論にも感服致し
かね候、唯哲學的理智に築き上げたる土臺
に立つ宗教的信仰こそ望ましき次第に御座
候へ。
大先生は面白き比喩をお用ひ相成候もの
かな「宗教は火にて哲學は水也」と。今
暫く大先生の比喩をそのまゝ借用するの無
禮を御赦し下され度候、
「哲學は水にして宗教は火也、故に哲學と
いふ水は到底宗教の敵である」と之れは
大先生にも似合ひたまはず少し輕忽の斷定
にては無之候や、水と火と無生物そのまゝ
を衝突せしむれば互に害ありとは申せ、こ
の哲學水を人生といふ釜に入れて宗教の
火で燃やせば、火を害することなく却て湯と
申す人生に必要なるものと相成利益を與ふ
ることも多きは如何の事實に候や
人生智情意を有す、理を究むるも本能情
の働き動くも亦本能、強ひて意思の力により
て情緒を禁抑すること夫れ自身痛快と致せ
らるゝことも有之候。
若し人生てふ釜を用ひて水を利用するこ
とを知らざるの徒は、蓋し度し難き頑固者
又には無御座候や。斯く申せばとて決して
大先生を罵る譯にては無之、畢竟の念は之
れしこの事位にて冷却するほど薄情女に
ては無御座候間乍憚御安心下されたく候。

七

妾の前稿に於て「已むに已まれぬ女性の
一大事と見てとりしが故に茲に出射張り申
候」と申上げ候ひし、それに就いて一言
「女性に關する一大事」と愚見披瀝いたした
く、煩はしく思はるゝ候にも、今暫し御
忖論の筆を與はりたく申上げ參らせ候。
大先生は哲學を排する餘り其餘勢飛ん
で無學の女性を罵倒致され候事甚だ心得か
ね候。尤も多くの婦人は今猶閨房以外の光
景を知らず、生存競爭てふ激浦たる怒濤が
脚下に溺れるに拘はらず安然として惰眠を
貪りつゝある現狀にて候へば、強ちに大
先生を恨むとには御座候はねども、現代の
婦人比々皆然りと宣はば妾不肖ながら否と
斷言するを憚らず候。
今日の時代思潮を解するもの絶無とは申
されまじく、從て哲學的頭腦を有する者も
少からず候。「思索に經驗なし」かりしは事
實にて候、之れ從來の婦人に課せられたる
社會的不開の罪にして、今日の婦人の罪にて
は無之候。愚考能はざる故に却つて積極的に新ら
しき知識を得んと努力邁進いたせる勉強の
樣こそ、實に時代思潮に驅られつゝある新
婦人の現狀に候へ。彼等は迷信にて候ひき
彼等は因循にて候ひき。彼等は陋劣なる感
情の奴隷にて候ひき。而して今日の大多數
の婦人また依然舊態に沈淪いたし居り候事
も實際にて候。さはれ此窮境を脫して新世
界新時代の婦人たらむと苦心せる幾多の
る女性の有之候事も亦決して否むこと能は
ざる事實と確信いたし居候　かくて彼等が
界に其勝しげなる眼をしばたゝきつゝ喜悦
滿面に溢れ居候樣のいぢらしげなる　之れ
唯詩人の空想とのみ排し去り給はざらむこ
とを切に祈上參らせ候。
切言いたし候へば大先生が罵倒相成候婦
人は舊思想の婦人の謂にして、新思想を呼
吸し、吸收せむと努力せる新婦人には未だ
論鋒相違せざることを御承知下され度、今
少し新時代の少壯婦人の御研究がついて肝要
と憎まれ口を叩きたく候。

八

多年景慕いたし候大先生に初めて御目見
え致候ことゝて、頭の內混亂致候上に側ら
ぬ罪の後や先き、拙き水莖の跡お目に掛け
るも亦恥かしく、一時引き裂き捨てんか
とお思ひ候へ共　論捨てゝ故を以て初より
來てたまらぬほどの御方とは信ぜられず、安
心して思ふことの半を申上候。唯お恥かし
さに獨り頬を赧らめ申候。
最後に「世界婦人」の編輯に就いて一言申
上候。
遺憾なれば通ずとか申候如く、御誌の編輯
に就ても中々御怜悧にならせ給ひし御事か
な。
プラトーを懶惰の乞食と譏り、**カント**を
腑脫の阿呆と罵り、乃至**クロムウエル**や**ナ
ポレオン**や**カーライル**を馬鹿といひ鈍物と
貶し去ればとて、所謂死屍に鞭つものにて
權力の肥並なき無類の事業、先づ「世界婦
人」の爲に萬歳を三唱致し候。
反之一歩其道を誤り今日の生ける權勢
たる弘大明神や山縣大權現に指一本にても
觸れ候ならば、あらたかなる忌神樣の御利
益覿面にて候ふものを、流石に無難の境地
を辿らるる御名功の程は々殊勝に御
座候。
命あつての物種、何卒幾久しく御續け
下さるは樣願上げ參らせ候。御氣の揃氣、決
して一意して荒野たちの係論にお掛り遊ば
さるゝこと萬々無之候、御健康蒙ひ
たし候。
くだくだしき事共申上げ御目を汚し候事
甚だ恐縮の至りに存候。
鼓まで書き了へ候て忽然として〇の緒目是
失ひ候と同時に、何故とも存ぜず候へ共俄
かに胸をときめかし居りて、人無き室なが
らではなく袖にて掩ひながら其に突伏申候。
不思議！不思議！！誠ー諭又ー謝！！
景慕せる大先生御〇〇〇されたく所々
いつか來らむお目もじの折を〇〇居り申候
失禮の言の葉に御赦し下されたく切に〇
と上げ參らせ候かしく／＼かしこ。

嬉し花

曉舟村郎

雲の名所と傳へいふ
越路の空ゆ冬央ば
白金ひらめく雪化粧
清き大空春日催
一段込みし杉木立
眞竹直々色映えて
氣高き姿を水鏡
やとす岸邊の巖かも
若葉すよ上に腕みし雪
昨宵の寒さに氷りたる
咲きを赤き手々の先き
小さき口吻け受の長
姉なる方が十條り
阿院なる柄のいたちに
小爪の糸を爪縦りつ
微かに溺いす嬉し曲
父を待つ間か母戀ふか
越路寂しき冬空も
我國の花に綻びぬ
春早や生えよ花の上に

(一九〇九年二月一日越前豐田郡御瀧にて)

木賃宿

同人

イと叮嚀に虱まで
上等十錢米四合
前前布團に杜鵑聞く

(五月十六日土佐新川にて)

日は入りぬ

同人

日は入りぬ水平線下
今日も成すべき務め終へて
黄昏の音波に抑えて
金色添ふる雲繁へ
落赤暖る北陸の
中の鐵路を踏みしだき
〇〇〇〇を終へたれば
〇〇〇〇〇光榮こそ如何？

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

木下尚江君著

新刊小說 **勞働**

五版 小說 **乞食**

三版 小說 **墓場**

誤れる基礎に建設を企つ改築又改築益々破壞沒落して而も自ら悟らず詐つて人類の進步と强辯するもの實に今日の文明なり疑聞わるもの憂愁あるもの憤懣わるもの乞ふ來つて「勞働」を看よ

各正價三十五錢
各送料六錢

東京本鄕弓町 昭文堂
振替東京七六七四番

伊豆三島 花島煉乳場製
名譽ある **金鵄ミルク**

東京市日本橋區大傳馬町
發賣元 逸見山陽堂
（電話浪花二一九五番）（振替口座三一六番）

瓦斯の應用

燈火

白晝の如く、黄と白とを見分くることが出來る位、光力が强う御座います。普通用ひられて居るものは五十燭光で一時間の瓦斯代が僅か四厘しか入りません。

瓦斯竈

御飯なれば二升が十七分間で出來、瓦斯代一錢四五厘、御湯なれば四五分で沸きます。殊に竈は月三十錢の損料で御貸致しますから、至極お手輕であります。

東京瓦斯株式會社
神田錦町

福田英子新著

小說 **白薔薇**

近日發刊
價額未定

肉眼を開いて人生を見れは、人生は美なるが如く、醜なるが如し、靈眼を開いて人生を見れは、人生は亦美なるが如く、醜なるが如し、出來人生は見るべき者に非ず、恰も白の無色なるか如し、白薔薇は白色の花なり、色なり、見せんが爲めのものなり、蓋し、賣らんには見せざる可らず、食ふには賣らざる可らず、白薔薇の著ある所以なり。

府下角筈
世界婦人社

齒科治療 自午前八時 至午後十時

齒科醫 **吉瀨才一郎**
東京市神田須田町二十六番地
（萬世橋內右横町）

●勞働者諸君に限藥價診察料共御隨意
●晝間執業者の便利上夜間十時迄治療

涙紅醫院長
醫士 **一瀨鷹一**

一院 日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

最も誠實に最も懇切に
民刑訴訟事務を執る

小石川區諏訪町卅五番地
添田增男

小兒科
內科
婦人科

每日 自午前八時 至午後六時

淺草區馬道町三丁目
小牧醫院

石巻良夫著（經濟史論叢第一冊）
原治的共產制
定價郵稅共拾四錢

本書は史家に依りて忘却されたる史前時代に遡りて奇々怪々なる人類生活の狀態を具會學上の見地より論じたるもの著者の自ら信じて獨創の見と爲すもの亦乏しからずし體的社會發展史論の一端也◎本書發本少部御望の方は至急申込まる可し

經濟史論叢第二冊 **近世資本主義論** 近刊

申込所
名古屋市東區武平町三ノ一六九石巻良夫

水彩擦筆 **肖像畫應需**

神田區美土代町二丁目一番地
浦田鳥城